

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

私は、専攻科福祉専攻 12 回生の斎藤良典です。

私は 2013 年に専攻科福祉専攻に入学しました。当時は学生 8 名の学生で全員、幼児教育・保育科から来た子ばかりでした。全員それぞれに面識があり、ある程度人間関係や関係が作られた中での専攻科のスタートでしたのでとても勉強しやすい環境であったと思います。先生たちとの距離も良い意味で近く、これもとても勉強しやすい良い環境のひとつだったと思います。

授業は座学だけではなく、実技や見学など、実際に利用者様と関わるなど、実際に見て聞いて、体験する講義も多かったように思います。それが実際に介護現場で働く際にとっても役立っています。現場で何かあった時や、基礎知識を尋ねられたり、実際に支援するうえで専攻科福祉専攻で学んだ知識がとても活かされています。学校で学んだ事は現場では通用しないと言われることもありますが、教科書に載っている事や講義の内容は支援する際に、知識としてとても必要な事であったり、支援の根底にあたりしています。根拠のある介護を行う為には、正しい知識があつての事であると考えます。その事から根拠のある介護を行う為にも、教科書に載っている事や講義から学ぶ事は現場でも通用することだと思えます。それがあつての現場での仕事や介護技術や知識であると考えます。

転勤のある仕事に今就いていますが、在学中の実習は障がい者から高齢者まで学びました。今後、障がいや高齢者施設で働く事になっても、どちらでも正しい知識を持って働くことが出来ると思えます。それはやはり、専攻科福祉専攻での学びが自分の基礎となっているからです。もし、今後壁に突き当たったとしても、専攻科福祉専攻同窓生を中心に組織された福祉の里という場所が自分を正しく修正してくれる事を信じています。閉科したとしても、専攻科福祉専攻に縁がある人が集まれば、いつでもどこでもそこが専攻科福祉専攻という場所になると思えます。

2022 年 3 月
12 回生 斎藤良典